潜入媚捜査官 石月楓

陵辱は捜査のあとで

島津六

挿絵／モティカ

試し読み版

リアルドリーム文庫

Contents

目次

第一章　潜入の女捜査官……4
第二章　虎口にて……41
第三章　地下室に散る華……109
第四章　汚れゆく日々……159
第五章　嬲戯に墜つ……196
第六章　脱出、そして……229

登場人物 *Characters*

石月 楓
(いしづき かえで)

公安部の女捜査官で二十五歳。一つのことに集中するタイプだが、自分の辞書に存在しない状況になると慌ててしまう。公安のダミー企業に勤務しつつ、捜査に励む。

セラフィム九条／天野龍斎
(せらふぃむ くじょう／あまの りゅうさい)

メシアの曙ではナンバー2、煌神教では教祖として暗躍する六十代後半の男。楓の美貌に目をつけ執着するようになる。

工藤 哲郎
(くどう てつろう)

公安部の警部で50歳後半の壮年。楓の上司としてフォローするも、楓を度々危険な任務へと送り出している。

スローネ沢田／沢田明希
(すろーねさわだ／さわだ あき)

メシアの曙のナンバー3の三十歳。セラフィム九条の愛人として肉体を提供している。

第一章　潜入の女捜査官

一

石月楓（いしづきかえで）は若干の息苦しさを覚えながら、長い板張りの廊下を進む。白く無機質な合板の壁が歩む者の両側から奇妙な圧迫感を与えてくる。

（何か意味があってこういう造りにしているのかしら？）

彼女の気性を表すかのように上方を指す眉と勝気そうな大きな眼を、表面上は期待に輝かせながら廊下を進む。廊下ですれ違う者が皆、自分の様子を窺っているような気がしていた。あえて化粧をしないでいる楓の白い頬を、一筋の汗が流れ落ちていく。

「！」

作り笑顔を浮かべる楓が、空間の持つ圧迫感に耐えかねた頃、前を進む作務衣（さむえ）の男が立ち止まった。彼女の背中に緊張感が走る。どこか爬虫類めいた雰囲気の男は無言で傍らの扉を開き、中を指し示した。

「……失礼します」

楓は声をかけつつ、室内へと足を踏み入れる。廊下と同様に白く無機質な室内には二人の中年男性が立っていた。

「お待ちしていました。ヴァーチャー・石月」

片方の男が楓を『階位名』で呼ぶと、床に置かれた籠を指し示す。宗教団体『メシアの曙』において第五位の『ヴァーチャー』の階位は、上からも下からもちょうど真ん中の位置である。

「まずはそこの浄衣をお召しになって下さい」

「俗世の汚れを持ち込めるのはこの部屋までとなっています」

練習したかのようなタイミングで二人が交互に楓に説明をする。籠の中には白っぽい衣装が畳まれて入っていた。楓は内心で眉をしかめる。

（この場で着替えろっていうの？）

説明を終えた男達は半眼で中空を見据えている。ここで彼女がとる反応は恐らく観察されているのだろう。仕方なく楓は自分の着衣に手をかけた。

厚手のセーターを捲り上げると、中に着ているのは無地のブラウスである。肩口で切り揃えられた黒髪と、ブラウスの白い生地とのコントラストが清廉な美しさを演出していた。シンプルな衣装であるが故に、胸部の豊かな膨らみがより強調されている。

彼女がブラウスのボタンを手早く外すと、白い生地の隙間から楓の肌が仄白く見え隠れした。
ボタンを外したブラウスはそのままに巻きスカートのホックを外す。野暮ったいスカートがぱさりと小さく音を立てて床に落ちる。ブラウスの裾からちらちらと覗くベージュのパンティは、極めて地味なデザインである。楓は腰の辺りに手をかけるとストッキングを下ろす。下半身を締め付ける薄い生地から彼女の両脚が解放された。
ブラウス越しにも分かる楓の高い腰から伸びる両脚には、薄く筋肉のラインが浮いている。筋繊維の織り成す曲線が優美に絡み合い、楓の下半身のラインを引き締めていた。
スカートを脱いだ彼女は、再びブラウスに手をかける。上衣を脱ぎ去ると、楓は下着の上下のみを身につけた姿になった。ブラジャーもパンティ同様にシンプルなデザインである。
視線を散らしているように見える男達が自分に意識を注いでいるのを感じる。楓は二の腕に不快感の粟粒を立てながら、籠の中の衣装を手にとる。
「ヴァーチャー・石月。着衣は全て脱がれるよう」
「これより先、貴女は俗世の汚れから解き放たれるのです」

男達から警告を受けて、楓は身体を硬直させる。
（この場で全部脱げってことなの!?）
今の彼女は敬虔（けいけん）な信徒の『ヴァーチャー・石月』である。第五位の自分よりも上の階位にいるであろう男達の言葉には従わなければならない。このタイミングで警告を発したということは、『浄衣』とやらを一旦着た上で下着だけ中で脱ぐ、という方法は許されないのであろう。楓は一つ唾を飲むとブラジャーのホックに手をかける。
ぶつ、と軽く音を立ててブラジャーの拘束が外れる。乳房がはしたなく弾むのを押さえるように脇を締めながら下着を脱ぎ去った。開陳された楓の乳房は筋肉に押し上げられるように前方に突き出している。それにより、ただでさえ豊かな彼女の媚胸はよりスケール感が強調されていた。
先端で色めく乳首は淡い鴇（とき）色で、乳房自体のサイズと比較すれば非常に小ぶりである。同じく可愛らしいサイズの乳輪は外気に晒されて、可憐な魅粒を隆起させていた。男達の視線が突き刺さるのを感じて、楓は羞恥に頬を染める。
こうなってはさっさと脱いで『浄衣』を着てしまえ、とばかりに楓は勢いよくパンティを下ろしてしまった。陰部というのは位置的にも見えにくいうえに、そもそも陰毛に隠されているのだ。考えようによっては乳房よりも露出している感覚は薄い。

それでも、ヘソの下に控えめに繁茂（はんも）する彼女の陰毛は男達に凝視されていた。白い床とのコントラストで、楓の股間のディティールも把握されているかもしれない。楓は両脚と両脇を締めるような姿勢で、籠から『浄衣』を取り出す。

（作務衣じゃあないのね。これって、健康診断の時に着る……）

どこにでもある検査着だった。一般的に『浴衣型』と呼ばれている、脇で紐を締めるだけの簡素な衣服である。楓は今回の一件のために、この『浄衣』を五万円で購入していた。

（これは儲かるわけね）

心の奥で溜息をつきながら『浄衣』を着る。ペラペラの生地は彼女の乳房のフォルムを露骨に表出させていた。膨らみの頂点でポツリと陰影を落とす乳首の突起もはっきりと位置を示している。

半眼の男達は納得したかのように微かに顎を引くと、部屋の奥の引き戸を指した。

「では、ヴァーチャー・石月。あれより『天道場（てんどうじょう）』へおいでなさい」

（ネーミングで差別化ってのも、随分と子供騙しな気がするけど）

男達に見えない位置で呆れ顔をする。引き戸を開くと、先ほどの通路と同じような白い廊下が見える。楓は深呼吸をすると、魔宮へと踏み込んだ。

一

百七十センチ近い長身の石月楓がスーツ姿で颯爽と歩くと、彼女を見慣れた同僚であっても思わず振り向いてしまう。切れ長の眼をよりくっきりと際立たせる鋭利な眉山、柔らかいカーブを描きながらも細く高い鼻梁。肩にかかるショートに切り揃えられた頭髪と、固く結ばれた口元を彩るダークカラーのルージュが彼女のクールな容貌を一層引き締めていた。

怜悧な美貌とは対照的に、歩を進めるたびにゆっさゆっさと派手に縦揺れする乳房は実に奔放だった。スーツの胸元からこぼれそうなほどに激しくバウンドする肉西瓜はすれ違う男達の視線を釘づけにしている。

もっとも、楓自身は異性からの視線を特に意識はしていなかった。学生時代に、色恋しか頭にない連中を嫌というほど見てきたためである。彼女は涼しい顔で目的地の扉をノックする。

「工藤警部。石月です」

「どうぞ」

室内で待つ工藤哲郎（てつろう）は五十代後半の男性だった。短く刈り込んだ頭髪とずんぐりむっくりな身体つきは鈍重な印象を与えるが、眼光は昏く冷徹な光を湛えている。

「『メシアの曙』の件、どうだね」

楓が席に着くと同時に工藤が口を開いた。彼女もまた挨拶抜きで本題に入る。ブリーフケースから資料を出し、視線を落とすことなく言葉を紡ぐ。

「都内の支部に入りましたが、経典を無理やり買わされたり、寄付金を徴収されたりといった事案は今のところありません。教義以外の活動に関しても不明です」

「そうか。なるべく早く本部に移れるようにしてほしい。焦ることはないがね」

「努力します」

石月楓は公的な立場は巡査である。だが、彼女は公安部捜査官の一員として一般の警官達とは異なる職務に就いていた。その任務こそ、現在彼女が行っている『メシアの曙』の内偵である。

信徒を装って教団の支部に潜入した楓の当面の目標は、教団本部を捜査することであった。そのためには信徒として熱心に働き、教団から評価を得て、本部での活動を許可されなければならない。

日中は、公安がダミーとして用意した企業でＯＬとして実際に働き、夕方以降は『メ

シアの曙』で経典の研究会や勧誘活動に務める。それが楓の現在の生活だった。
今日は彼女の直接の上司である工藤がダミー企業へと赴き、楓から報告を受けている。スパイ生活を続ける楓にとっては、彼こそ自分と公安を結ぶ唯一の人物だった。

『メシアの曙』は関東地方で約三千人ほどの信者を抱える宗教法人である。元々はキリスト教と仏教と神道を習合した経典を読みあうだけの集団だったが、現在の団体名に改名して以来、修行やセミナーなどを頻繁に開くようになった。
徐々に知名度が上がり信者数も増加を始めると、動く金も増える。金の流れが活発になると、それに目をつける人間が現れる。そして金の流れは徐々に不透明になり、活動内容も灰色になっていく。
現在の代表である『ミカエル・神威（かむい）・白鳥（しらとり）』は四代目の教祖だが、彼の代になってから『メシアの曙』には不穏な噂が流れ始めた。脱税や違法薬物の使用などの犯罪行為の存在が囁かれているのだ。
そうなると公安としては捜査に踏み切らざるを得ず、五年ほど前から捜査員が数人がかりで内偵の任務に就いていた。その結果、一部の決算報告や資産運営にグレーな部分が確認されることとなった。とは言え、五年もかけた捜査でありながら決定的な

証拠を得るには至っていない。
「同じ捜査官を繰り返し接触させれば怪しまれる。かと言って内通者を用意するのも監視設備を整えるのも、我々の予算では賄いきれない」
人員的にも金銭的にも、もはやデッドラインが見えている状況である。指揮官である工藤としては、そろそろ『メシアの嚆』をめぐる案件に決着をつけたい段階であった。
「分かっています。何としても私が彼らの本部に潜入して、ケリをつけます」
「君に最後の大荷物を押し付ける形になってしまうが、よろしく頼む」
信徒を装っての潜入から一年が経過し、ようやく支部からの推薦を受けた彼女は本部道場での修行を開始しようとしていた。そして、その始まりからセクハラとしか思えない対応を受けているのである。
『宗教に救いを求める実直で地味な女』というキャラクター設定のため、現在の楓はほぼノーメイクである。身なりを整えている時とは異なり、シャープな美貌はかなり柔らかく映っていた。
（支部では全くセクハラじみたことなんてなかったけど、いきなりこんな目に合うと

はね……）

憂鬱な気分でいっぱいだったが、足掛け六年にわたる捜査である。自分の勝手で台無しにはできなかった。それにここまで来た以上は犯罪の証拠を発見しさえすれば、それで捜査は完了である。

（用心してカメラを持ち込まなかったのは正解だったわね。今頃きっと私の荷物を調べているに違いないわ）

自分が脱いだ衣服や下着に何者かが触れているかもしれないことは考えないようにして廊下を進む。やがて突き当たった扉を開いてみる。手をかけた金属のドアノブがわずかに結露している。

（湿気？）

何となく嫌な予感を覚えつつ扉を開く。内部は二十畳ほどの空間だった。そのうち半分は水をなみなみと湛えたプールである。既に数人の男女が浸かっていた。プールの外には作務衣を着た男女がおり、それとは別に奥の椅子には着物の老人が掛けている。

（ここは水垢離（みずごり）の部屋ってわけね。一人だけ着物なのは幹部かしら？）

作務衣の男女は大きな柄杓（ひしゃく）でプールの水をすくっては中の信徒達に浴びせている。

水をかけられた者は経典の文言を唱えていた。幹部と思しき老人は、どこか冷たい視線でその様子を眺めている。

（ようやく修行らしくなってきたわね）

楓は手前にいた作務衣の女性の前で黙礼をする。三十歳そこそこに見える女性だったが、金髪に染めた髪もさることながら、くっきりと濃く施されたメイクも教団の人間には相応しくないように見えた。恐らく、身だしなみで我侭ができる程度には高位の人物なのだろう。冷たく無表情な美人だった。

「そちらの方は初めての水垢離ですか？」

「はい。ヴァーチャー・石月です。勝手が分からないのでご指導を……」

「スローネ・沢田です。では『浄槽』へお入りなさい」

『スローネ』は第三位の階位である。恐らく教団に十人程度しかいないであろう、高位の人物だった。内心で驚く楓の視界に、奥で座っていた老人がこちらにやってくるのが見えた。楓の視線に気付いた沢田が、背後に立った老人を示す。薄く笑みを浮かべてはいるが、暗渠の如く底の読めない眼の男だった。

「ヴァーチャー・石月。こちらは教祖様から最も信任の厚い信徒、セラフィム・九条です」

（セラフィム……ナンバー2じゃない！）
沢田の紹介の言葉に内心で驚愕する。初日にこんな大物と出会えるとは思ってもいなかった。外見だけならば、どこにでも居そうなずんぐりむっくりの体型の老人だった。六十代後半に見えるが、肉が張って血色のいい顔と老獪な底知れなさを秘めた眼が、彼に謎めいた雰囲気をまとわせていた。
「石月君、ね。折角だし、私が水垢離を手伝おうね」
「！」
予想外の提案に楓は息を飲む。だが、動揺を悟られないように深く黙礼を返すと、他の信徒を真似てプールへと向かった。九条は湿気のためにより脂ぎって見える顔を女捜査官へと向けている。じっとりと粘りつくような視線を感じていた彼女の二の腕に鳥肌が立つ。
プールの枠を跨ぎ越す時に、浄衣の裾が開いてノーパンの陰部を晒さないよう気を遣いながら、楓は水の中へと身を移した。春先ということもあり、さほど水温は低くない。深さはちょうど彼女のヘソの辺りだった。
裾が浮き上がって太股が露わになる。美女はさり気なく身体を揺すって浄衣を下半身に巻きつけるようにして、肌の露出を抑えた。自分の隣でプールに身を浸す男を見

ると、目を閉じて合掌している。
（あのポーズが作法ってわけね。それにしても……）
隣の男性の濡れた身体に張り付いた浄衣は見事に安物の生地の本領を発揮していた。彼の肌が透けているのはもちろんのこと、濡れた生地には体毛すらも黒々と浮かび上がっている。女性の信徒もプールに入っていたが、五十代は越えているだろう。若い女性は楓のみという状況で、これから彼女に水がかけられるのだ。
（本部に来てからどんどん下種（げす）な本性が露わになっていくわね）
苛立ちを通り越して、半ば呆れ返ったような気分で乙女は目を閉じて合掌する。直後に身体のそばで何かが動く気配はあり、頭部に水がかけられた。
楓は経典の文言を呟き始めた。体表を水が流れる感覚と、自分の唱える経文のリズムとが合わさり、楓は奇妙なトリップ感を覚え始めていた。心音と経文の拍動がシンクロし始め、自分の身体が水に溶けるような錯覚に囚われる。
（胎児が聞く母体の心音とか、羊水の中で揺られる感覚へと回帰させる手法ね。素人はこれで宗教的トランスだと勘違いしちゃうのかしら）
楓は『メシアの曙』に潜入する事前準備として、カルト教団が得意とするマインドコントロールに関しても一通りのレクチャーを受けている。この程度のインスタント

なトリップ感で本当にトんだりはしないが、それでも水に浸りながら心音の如き柔らかなリズムに包まれれば頭がぼんやりとしてきた。合掌した親指の爪で手のひらを引っ掻いて意識を保つ。恐らく十分ほど続いた水垢離は、沢田の合図と共に終了した。

「これにて水垢離は終了とします。では皆さん、次の間へどうぞ」

濡れた身体のまま、一人ずつプールから出ていく。楓は頭を下に向けていたが、粘つきながらも刺し込まれるような鋭さを帯びた視線を感じていた。最初からずっと彼女に焦点を当て続けている九条からの視線である。彼女は部屋を出るまで、震えそうになる身体を懸命に抑えなければならなかった。

水垢離の後に招じ入れられたのは板張りの道場だった。二百人は座れるであろう空間の中央に、楓を含めた信徒六人で車座になる。濡れた身体を冷やすのが気になったが、室内には空調が効いており、風邪を引く心配はなさそうだった。むしろ男達がチラチラと送ってくる好色な視線の方がよほど不快である。

楓の白皙（はくせき）の美貌もさることながら、ぽっちりと浮き上がった薄ピンクの乳首も、股間に見える陰毛の繁りも男達を視姦に走らせるには十分な魅力を示しているのだ。それでも彼女は『宗教に救いを求める実直で地味な女』を演じて、男の視線に気付かな

い風を装う。
しばらくすると九条と沢田が現れた。九条は固着したかのような酷薄な笑みを浮かべて信徒達に口を開く。
「水垢離の最中に様々な想念が皆さんを苦しめたと思います。それをここで吐き出しましょう。皆さんにはこれから本部で活動していただきます。そのためにも身体の奥に残った邪悪な気を全て断ちましょう」
九条はそう言うと自分の近くに座っていた信徒を促した。濡れた髪の隙間から見事に頭皮を露出させた五十代後半と思しき彼は、つっかえながら発言する。それは意味を成さない心情吐露だったが、車座になった信徒達は目を真っ赤にして聞き入っていた。
（何よこの茶番は）
甘ったるい連帯感の演出に吐き気がしたが、楓はレクチャーを思い出して沈痛な表情を作る。沢田が冷たく淀んだ瞳で自分を凝視しているのを感じたのだ。
「ヴァーチャー・石月。この中で貴女が最も若い信徒です。貴女がどうやってこの『メシアの曙』に入信し今に至ったのか、よろしければ起立して発表して下さい」
楓の発言の番になると、いきなり九条が割り込んできた。それまでの談話で涙ぐん

だ信徒達は彼の言葉にうんうんと頷いている。
（とんだクズね、この男）
もとより抵抗のできない楓である。仕方なく起立する。うっかり立ててしまった膝頭の隙間からちらりと陰部が覗き、正面に座る九条の眼を楽しませた。
暖房が効いているとはいえ、広々とした空間に一人で立つと空気の流れがダイレクトに肌を刺激する。肌が粟立つと同時に、控えめな乳首がむりむりと隆起して存在を主張し始めた。さすがの怜悧な才媛も恥じらいに頬を染める。だが、一つ咳払いをした彼女は気持ちを切り替えて発言を始めた。

三

楓は週に五回、いずれも夕方六時から本部での修行と共に、雑務の処理を割り振られている。掃除に始まり事務仕事などが用意されていると説明を受けていた。
前回と異なり、楓は更衣室へと案内された。ロッカーの並んだ標準的な更衣室である。彼女の他に誰もいない更衣室で浄衣へと着替える。
（最初からここに通しなさいよ。全く下劣な連中だわ）

更衣室を出た彼女は事前に指示された通り、『広間』と呼ばれる部屋へと移動する。相変わらず白い廊下は冷ややかな圧迫感を与えるが、前回よりは幾分気楽に歩くことができた。

（この部屋ね。いきなり仕事を言い渡されるのかしら。それとも見学でもさせられるのかしら）

複数の事態を予測して対応方法を模索しながら、広間のドアを開く。室内には椅子が二十脚ほど用意されており、既に十名ほどが着席していた。少し離れたところに座っているのは、一番最初に楓を案内した作務衣の男だった。皆の視線が自分に集まるのを感じて、楓は深く頭を下げて挨拶をする。

「ヴァーチャー・石月です。本日よりお勤めをさせていただきます」

着席していた男女が振り向いて微笑んでいる。その中で作務衣の男が立ち上がった。三十代半ばと思しき彼は楓に歩み寄ると、お約束の表情の見えない半眼で告げる。爬虫類めいた彼の顔からは感情がまるで読み取れなかった。

「スローネ・宮脇（みやわき）です。ようこそ、ヴァーチャー・石月。貴女を歓迎します」

そう言いながら、口元だけで笑みを浮かべる。次の瞬間、楓が反応する間もなく宮

脇の手が彼女の浄衣の襟を掴んでいた。
「ヴァーチャー・石月。ここに俗世の汚れは持ち込んではなりません。最初にお伝えしていませんでしたか？」
「えっ……あ！」
彼の言葉が下着を指していることに気付く。宮脇は掴んだ襟をゆっくりと開いていく。楓が浄衣の中に着けているグレーのブラジャーが露わになった。宮脇は噛んで含めるように告げる。
「無論、間違いは誰もが犯すもの。貴女を責めはしません。ただし、この下着は直ちに捨て去っていただきます」
そう言うと宮脇は手を離した。楓は一気に自分の心拍数が上昇したのを感じる。背中を冷たい汗が流れていた。一つ唾を飲むと、上ずる声で宮脇へ謝罪をする。
「申し訳ありません。すぐに脱いでまいります……」
「ヴァーチャー・石月。直ちに、です」
爬虫類のような粘着質をもって宮脇が楓に告げた。楓は彼の言葉の意図を察して、不快感に肌を震えさせる。
「……分かりました。直ちに脱ぎます」

すぐ目の前に立つ宮脇に加え、着席した七人の男と二人の女の視線が突き刺さる中で、楓はブラジャーのフロントホックを外した。前方に飛び出した乳房が、自由を謳歌するかの如くふるりと誇らしげに揺れる。しかし、襟元から手を入れれば抜き取れる背面ホックのブラジャーとは異なり、美女の下着は背中からストラップを抜かなければならない。楓は砲弾乳房を放り出した状態でもぞもぞと身体を動かす。蕩ける魅乳はブラジャーを抜こうとする彼女の所作に合わせてぶるんぶるんと跳ね回り、はしたない自己主張に余念がない。ようやく下着を取り去る頃には女捜査官の美貌は恥辱と怒りで真っ赤に染まっていた。

（この男、ふざけた真似を！）

すぐに余罪をたっぷりと乗せて逮捕してやる、と心に誓いながら浄衣の裾から手を入れる。わずかに前傾する姿勢は彼女の乳房の存在感をより明瞭にアピールした。彼女がパンティを下ろしていく動きに連れて、たっぷんたっぷんと振り子の如く前後左右に魅惑の肉山脈が波打った。着席している男達は目を血走らせてその様子を見ている。

楓はパンティをするすると足首まで下ろした。遮る物のない秘部が外気に晒され、不安感が彼女の胸に湧き上がる。ふと目を上げると、宮脇が手を差し出している。

（握手じゃあないわよね……最低の変態だわ）

俯いた唇を噛み締めながら、楓は脱いだ下着を彼に渡す。美女の温もりを残す布きれが宮脇の作務衣の袂に消えた。

「では皆さんに、これからしていただくお勤めの内容をお伝えします」

そう言うと宮脇はテキパキと十人の男女に仕事を割り振った。販売用の書籍を梱包する仕事や、各支部から上がる報告書の整理、施設内の清掃など、業務は多岐にわたっている。その中で楓は清掃係に任命された。

（清掃係ね……どんな破廉恥な真似をされるのやら）

楓を含めた信徒達がそれぞれの持ち場で指示を受けるべく、広間から退出する。室内に残ったのは宮脇のみだった。人の気配が消え、広間が徐々に静謐な空間へと変わっていく。

宮脇はおもむろに袂の中から楓の下着を取り出した。グレーのパンティを広げると、しげしげと眺める。ここに来る直前に穿きかえられたパンティには残念なことに染み一つない。

表情を消していた宮脇の目がゆっくりと開く。鉛の塊のような濁った瞳には楓のパンティが映っていた。彼は広げた美女の下着で顔を覆うと、大きく息を吸い込んだ。

四

本部勤務になって三日目のことである。いよいよ楓は一人で作業を開始する運びとなった。だが、いきなり捜査を始められるわけもなく、しばらくは勤勉に仕事に取り組む姿勢を見せる必要があった。

板張りの廊下を雑巾がけする。膝を十分に隠すだけの総丈がある浄衣ではあったが、膝立ちになって廊下を掃除していると、いつ裾から陰部が露出するかと気が気でない。

楓の豊満な乳房は下着という拘束衣から解かれることで、少しの所作でもたぷんたぷんと揺れに揺れた。雑巾がけなどしようものなら、見ている側が恥ずかしくなるほどの暴れ乳となって彼女自身を悩ませる。

通路として機能している廊下であるが故に、それなりに人の往来はある。楓は誰かが自分の脇を通るたびに不安混じりの恥辱に身がすくむ思いだった。

（本当にこんなことが信徒に必要だと思っているわけ!?）

上層部、例えば宮脇などに異議を申し立てるのは簡単である。しかし、そうした不平不満は『信心不足』と判断されて、本部勤務という特権を剥奪されるだろう。そうなっては、ここまで来るために投入された有形無形の作業コストが全て無駄になってしまう。

（我慢よ、我慢。先輩達だって血の滲むような苦労を背負って私に道を作ってくれたんだもの）

スパイとして孤独な捜査に臨む公安の人間が、どれほど大変な思いをして職務を遂行しているか、彼女はよく知っている。それだけに軽率な行動はとれなかった。

女捜査官が次に移動した掃除場所は資材室である。文字通り梱包資材や消耗品が保管された、ひたすら什器とダンボール箱が並ぶ寒々とした空間だった。

十畳ほどの空間で楓が作業を開始してから十分が経過していた。まるで彼女が作業に没頭したのを計ったかのように、音もなく資材室のドアが開く。

「……」

入ってきた男は宮脇である。どろりと底光りする瞳が、背を向けて什器を拭いている楓を捉えた。男は音もなく近づいていく。

（埃っぽさがまるでないのだけは評価できるわね。それにしても、いつまで真面目に掃除係をすればいいのかしら）

そんなことを考えながら、棚の上部を拭こうと背伸びをした。その瞬間、彼女は背後から両脇をがっしりと捕らえられた。

「えっ⁉」

慌てて振り返ると、背後に宮脇の爬虫類めいた無表情があった。女捜査官の脳裏で様々な思考が交差する。脇の下にどっと汗が噴き出す。

（まさかもう私の正体がバレた⁉　こいつ一人なの⁉　どう切り抜ける⁉）

訓練を積んだ才媛はすぐさまベストな対応を模索する。相手が何を知っているのか分からない以上、余計なことは言わない方が良い。

「スローネ・宮脇、何か御用でしょうか？」

相手を刺激しないように、務めて落ち着いた口調で問いかける。脇の下に回された厚みのある男の手がひどく不快だった。

「貴女の様子を見に来ました。ヴァーチャー・石月」

そう言いながら、乙女の脇に触れる手のひらをじっとりと動かす。やがて男の指先は、楓の乳房へと侵攻を開始した。

（セクハラだったのね……）
「脚立を用意していませんでしたので、恐らく高いところを掃除するのは大変でしょう？　私がこうして支えていますから、作業を進めなさい」
「……はい、お手数をかけます」
そう言われては拒絶するわけにもいかなかった。口先では思いやりのある先輩を気取った宮脇は、ゆっくりと彼女の牝乳へと指をなじませ始める。張りのある乙女の乳房は、自らの魅脂へと沈み込もうと目論む男の指先に対して驕慢な反発を示した。
（さっさと掃除を済ませてしまえば、こんなセクハラなんて……）
薄っぺらな布地を一枚隔てて男の指先が乳房を這い回る汚辱に耐えながら、楓は什器の清掃を済ませる。これで隣の什器を片付ければ清掃は完了だ。
「あの、スローネ・宮脇。隣の棚を……んっ！」
思わず小さく声を上げてしまった。宮脇が楓の乳首をこりこりと抓（つね）るようにして指先に挟んだのだ。室内の冷たい空気を受けてわずかに膨らんでいた彼女の乳首は、男からダイレクトな刺激を浴びせられ、ぷくりと屹立してしまう。
「スローネ・宮脇……作業を、私は……っ！」
宮脇は既に『掃除の手伝い』という仮初のお題目を捨て去ったかのような熱心さで、

楓の豊乳を辱めにかかっていた。見事な張力で突き出した乳房を下から支えるように保持すると、そのまま前後に扱く。乳山の麓から乳頂へと向けて、男の手がしゅるしゅると絞り上げるかのように媚肉を按摩する。勃起した乳首が浄衣内で擦れる痛みと、敏感な乳肉が感受する愛撫の刺激に、楓は微かな声が漏れるのを抑えきれなかった。

「私は今、私の中にある功徳を貴女に送っています。快感を得るのは当たり前のこと。恥ずかしがる必要はありません」

「私は、ぅくっ、お勤めの最中です……快感なんて、ふくぅ！」

楓は力ない反論をするが、彼女の強気な言葉を裏切るように優美にカーブした眉山が美貌の中で下がり始めていた。什器の清掃を終えて両手を下ろすと、美女の滑らかな首筋が白く浮かび上がる。宮脇はその陶器の如き曲線美を慈しむかのように顔を寄せると、頬ずりを始めた。

（立場を利用して……卑劣な男ね！）

微かに感じられる髭の剃り跡が不愉快極まりない。少なくとも身なりだけは清潔にしているのが救いではあったものの、それでも好意の欠片も抱けない相手と肌を直接合わせる行為には嫌悪感しか生じない。

宮脇は楓が抵抗しないのをいいことに、いよいよ大胆に愛撫を始める。低い鼻を無

様に開いた彼は、頬を擦り付けていた美女の首筋からその芳醇な体臭を腹いっぱい吸引している。普段から鍛えられている女捜査官の肉体は、優秀な代謝能力を備えていた。肉体労働によって暖気された乙女は、塩気の効いた汗の香りを濃密に放散していたのだ。

（汗の匂いなんて嗅がないでっ！）

自分でも微かに感じる酸味を帯びた香りが音を立てて嗅がれ、美女は内心で悲鳴を上げる。だが、女捜査官はその立場故に抵抗することもできぬまま男の手に身体を委ねている。彼女の心で燃える使命感が、一時の感情で全てを台無しにするのを許さなかった。やがて宮脇の図々しい指先が、美女の素肌との触れ合いを求めるかのように浄衣の袷から潜り込んだ。

（なっ⁉）

普段は秘めている箇所を直接触られる嫌悪感に、楓の全身に鳥肌が立つ。宮脇は彼女の反応など気付かぬように、その新雪の如き美肌に欲望の食指を這わせる。乙女はナメクジが肌の上を動き回るかのような汚辱を感じ、宮脇に気付かれぬように伏せた顔を歪めた。

「あっ！　そんな、私にはお勤めが……っく！」

さすがにたしなめるような言葉が出てしまうが、美女の言葉は男を逆に燃え上がらせる。宮脇は乙女の胸元を撫でる指先を更に奥へと侵入させ、彼女の可憐な乳蕾をこねこねと指の腹で弄んでいる。楓は思わず漏れ出る声を咽喉の奥で噛み殺すが、小さな媚声を抑えきれない。

「スローネ・宮脇……あふっ、そんな……」

中指と親指で固定された乳首を人差し指でクニクニと撫で転がされる。スタンダードな乳愛撫とはいえ、緊張と汚辱に身体をすくめる乙女には遺憾なく効力を示した。楓の呼吸が徐々に早くなっていく。

(こんな行為で、私が追い詰められているというの!?)

牝の肉体は本人の望まぬ反応を表出させ始めていた。単調ながらも執拗な宮脇の愛撫は乙女の肉体をゆっくりと上昇させる効果は十分にあった。浅く早くなる呼吸と共に、体温が急上昇していく。ヘソの奥がどくどくと脈動を強め、肉体全体が熱に浮かされるような酩酊感に襲われる。

「そうです。ヴァーチャー・石月、その情動に身を任せるのです」

(何を勝手なことを! 刺激を受けた条件反射に過ぎない!)

彼女が自分に言い訳をすればするほど、胸の奥では鼓動が高まる。抵抗してはなら

ないという自縛の意識が、楓の肉体に宿る性感を逆に鋭敏なものとしていた。快感を否定すればするほどに、快感の存在を意識してしまっているのである。

ぷりぷりと健気に勃起した小粒の乳首は爬虫類男の稚拙な愛撫に満足するかのように紅く色付き存在を主張していた。宮脇のカサついた指は愚直な肉刺激で楓の性感を掘り起こそうとしている。美女は自分の背中がびっしょりと汗に濡れているのに気付いた。

（私の身体がこんなに反応するなんて！）

性に対して達観していると自認していた彼女にとって、異性からの強姦に近い愛撫にこれほどまでの反応を示す自分の身体そのものがショックだった。乙女の思考が硬直しかけているのを悟ったかのように、宮脇は空いている左手で手早く浄衣の肩をはだけさせる。袷を紐で結んでいるので、上半身が露出するようなことにはならなかったが、楓の乳房はその上部をほぼ曝け出すような状態になった。

「あっ！　スローネ・宮脇、これは！」

「ヴァーチャー・石月が随分と汗をかいているように見えたので、少し涼しくなればと思ったのですが、何か問題が？」

「……いえ、何でも、ありません……」

そう言われては拒絶もできなかった。宮脇は再び楓の首筋へと鼻を近づけた。すんすんと音を立てて低い鼻を蠢かせている。

「ふむ、量の割には老廃物の匂いが少ない、爽やかな汗ですね。酸味も薄い」

いきなり汗の感想を聞かされて、楓は眼を丸くした後に怒りと恥辱で白皙の美貌を真っ赤に染める。

（そんな感想、聞きたくもないわっ！）

宮脇は一通り乙女の放つ芳香を堪能すると、美しい曲線を描く彼女の項（うなじ）をベロリと舐めた。これにはさすがの楓も驚く。

「きゃぁっ！　えっ、何をっ⁉」

まさか、いきなり舌が自分の首筋を舐め上げるなどとは思っても見なかった。可愛らしい叫び声と共に、思わず彼女は背後を振り向いてしまう。女捜査官のすぐ背後に、宮脇の鉛のような眼球が光っていた。

「スローネ・宮脇⁉　今のは……なっ⁉　一体っ⁉　ちゅぷぅっ」

驚く間もなく乙女の朱唇に宮脇のガサついた唇が押し当てられた。いきなりの蛮行に驚く暇もあらば、彼のベタリと生臭い舌が唇を割って侵入してくる。咄嗟に顔を背けて男を振り払おうとする楓だったが、乳房を掴むように回された彼の右腕と、素早

く後頭部を押さえつける左手がそれを許さなかった。
（これって、キスされてる⁉　この男に！）
信じられない思いでいっぱいだった。胸を触る程度の行為であればセクハラの範疇に収まるかもしれない。しかし、これは粘膜接触である。まさか権威をかさに着てのこんな行為が許されているというのか。だが、そんな義憤よりも強く彼女の心で燃えている憤怒の炎があった。
（私のファーストキスが！　こんな男に奪われた！）

石月楓の通っていた高校は進学校で、周りの学生達は男女問わず遊びよりも勉学に青春を捧げていた。彼女も同様に勉強漬けの毎日を過ごしていた。一人っ子だった楓は、しっかりとした職に就いて親を安心させたいとの思いから、大学に進学してからも資格試験や就職のために勉強を続けていた彼女は友人も少なく、ましてや恋人を作ったことなどもなかったのだ。
それでもいつかは自分の支えとなってくれる素敵な異性が現れる、と彼女は少なからず期待していた。尊敬できる相手のために清い身体でいようとも考えていた。そんな楓の夢想は、新興宗教の信徒による立場をかさに着た強姦まがいの行為で瓦解（がかい）せし

められたのだ。
（こいつ……私を、女を何だと思っているの⁉　許さないわ！）
乙女の口腔を蹂躙する爬虫類男の貪舌は、慌てて歯を食い縛ったその歯茎をれろれろと舐め回す。その粘着質な容姿に違わぬ執拗な行為は、嫌悪感よりも恐怖を感じさせた。
「っぷぁ……ヴァーチャー・石月。貴女に功徳を授けます。浄衣を脱ぎなさい」
「っ⁉」
楓の口元から宮脇の口元まで、唾液のアーチが引かれている。それを拭いもせぬままに、爬虫類男は信じられない要求をした。乙女は怒りと呆れの混じった感情で、口元を戦慄かせる。憤怒のあまり穢れを拭うことさえ忘れられた朱唇からは言葉も出なかった。
「貴女をドミニオンに昇格させたいのです。貴女にはその資格がある」
（何が資格よっ！　適当な理由を作って言うことを聞かせたいだけじゃない！）
心の中で罵声を浴びせるが、ここを如何に切り抜けるべきか、楓は答えを持っていなかった。任務がある以上、安易に宮脇を拒絶することはできないのだ。彼女の中の冷徹な捜査官の牙城にヒビが入り始めていた。

「ヴァーチャー・石月。これは貴女が考えているような行為ではありません。安心して私の言葉に身を委ねるのです」
外見とは裏腹に、優しく沁みわたるような口調で男は囁く。たて続けの衝撃に痺れかけている頭脳のままで女捜査官は思考を巡らせる。
（ここは言うことを聞いておくべきなの⁉　でも、どんな目に合わされるか……）
しかし、後々の捜査を考えれば、宮脇に取り入っておく必要があるのかもしれない。任務と防衛本能の狭間で、女捜査官は懊悩する。そんな彼女を後押しするかのように宮脇が優しく黒髪を梳いた。
「貴女は誤解されているようですが、私は性交を要求しているわけではありません。貴女にドミニオンへと昇格していただくための確認のようなものなのです」
「……確認、ですか」
「そうです。貴女を知るための純粋な確認行為です」
「分かり、ました……」
「では、私に貴女の全てを晒すのです」
男の囁きに小さく頷いた美女は、浄衣の留め紐を解く。袷が弛めば、生成（きな）りの生地の隙間から淡雪の如き魅肌が垣間見える。楓は恥じらいのためにわずかに顔を背ける

と、自らの手で着衣を開いた。
（もし強姦しにくるようなら……それだけは何としても切り抜ける！　だけど、それまではこいつの要求を……）
凝視する宮脇の、微かに唾を飲むような気配に楓は改めて羞恥を覚える。美女は頬のみならず、その肉体までをも朱に染めていた。
やがて下着を着けない生まれたままの彼女の肢体が現れる。つんと立った乳首は胸の鼓動に合わせて緩やかに揺れていたが、それは彼女の不安による震えのようにも見えた。閉じた股間に見える陰毛の薄さもまた、楓の様子を儚げに見せていた。
「……確認して、頂けましたか……？」
やっとの思いで楓は声を絞り出す。勇ましく浮き出している筈の彼女の腹筋は、落ち着きのなさを示すかのように忙しなく上下している。宮脇はそんな彼女を安心させるかのように言葉をかける。
「ヴァーチャー・石月。私に背中を向けて頂けますか？　貴女の全てを確認しなければなりませんので」
（背中……）
このまま乳房と陰部を晒し続けるよりはマシかもしれない、と楓は思った。その肢

体を男から背けるようにしながら、身体を半回転させる。什器を向いて立つと、室内の照明が逆光になる。自分の前に広がる影と、無防備な背中を晒す恐怖とが楓の心を覆い始めた。

「もう少し、腰を下げて足を開いて。棚に手をつくとよいでしょう」

言われるままに身体を動かす。後ろに向けて尻を突き出すような姿勢である。乳房ほどの量感はないものの、筋肉で引き締まった楓のヒップはぷりぷりと肉が張り詰めており、是非とも触感を試してみたくなる様相を呈していた。宮脇も例外ではなかったらしく、美女の処女尻に手を置いた。

「ひっ！」

楓は思わず声を上げる。だが、ここまでしておいてご破算というわけにはいかない。肉贄の淑女は声を殺し、男の手に身を委ねた。

（私の尻が……撫で回されて……っ！）

視界から入る情報が限定されているだけに、触覚がより鋭敏になっているのかもしれない。宮脇の手が背中側から足の付け根までゆっくりと撫で下ろす動きも、逆に太腿側から尻たぶを持ち上げるように動く所作も、全てが明瞭に感じ取れた。

しかし、尻を撫でていた男の淫手はすぐにその双臀の狭間に息づく魅惑の渓谷へと

その攻撃対象を変更した。宮脇の指が尻肉をかき分けるようにして魅肉の谷底へと挿入される。

「きゃっ！」

初めて肛門に他者の接触を許した美女は、思わず高い声を上げてしまう。爬虫類男は楓の驚きなど一顧だにせぬままに、処女アナルの入り口を中指で撫でた。肛毛を持たぬ彼女の秘菊はこりこりと心地よい括約筋の感触で宮脇を楽しませる。乙女の気高い肛門は、雄の下劣な行為を拒絶するかのようにきゅっと締まった。

（肛門⁉　何のためにそんな場所を⁉）

処女そのものといった青硬さを見せる姫肛の感触に、宮脇はそれ以上強引な行為は行なわなかった。肛門から離れる彼の指に、楓は大きな開放感を得る。多少の落ち着きを取り戻した楓は、背後の宮脇の異様な呼吸音に気付く。

（何だこいつ、息をこんなに荒くして）

背後から聞こえる男の息は明らかに異常だった。早く浅い呼気の音が甲高く彼女の耳に刺さる。その荒い呼吸のままに宮脇は美女の尻を両手で押さえつけた。汗の浮いた尻肉に男の指がむにゅりとめり込む。

（次は何をする気なの⁉）

楓の背後に立つ宮脇は作務衣の前を大きく張り詰めさせている。彼は美女の尻をたっぷりと堪能し、次はいよいよその欲望のターゲットを彼女の秘部へと移そうとしていた。この時、楓の背後に立つ宮脇は作務衣の前を大きく張り詰めさせていた。彼は美女の尻をたっぷりと堪能し、次はいよいよその欲望のターゲットを彼女の秘部へと移そうとしていた。楓のヒップを引き寄せようとする中年男の指が張り詰めた美肉に食い込む。爬虫類男の呼吸が浅くなり、腰が醜く痙攣を始めた。

「宮脇君。こんな場所で何をしているのかね」

「えっ!?」

背後からの言葉と同時に宮脇の肩に手がかけられた。振り返った彼の顔が驚愕に歪む。

「セっ……セラフィム・九条っ！」

立っていたのは教団ナンバー2であるセラフィム・九条だった。それに気付くと同時に、宮脇の腰が醜く痙攣した。見る見るうちに作務衣の前に汚らしい濡れ染みが広がっていく。九条はそんな宮脇を冷ややかに見ると、感情の篭らない声で告げた。

「とりあえず身なりを整えたまえ。事情は後でゆっくり聞こうね」
そう言う彼の背後から現れた女性は沢田だった。彼女は床に投げ出された楓の浄衣を拾うと、彼女の身体に掛ける。
「スローネ・沢田……あ、りがとう、ございます……」
未だ思考の混乱の収まらぬままに、楓は何とか言葉を紡ぐ。相変わらず能面のようにドライな空気をまとった沢田が小さく頷く。
(助かったの？　いや、それよりも問題は……)
楓の前で薄笑みを浮かべる、セラフィム・九条の存在だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/